

# 「太陽の子」から単元「生命」へ

片 桐 啓 恵

はじめに

1986年度は1年生6クラスを担当した。高校1年の段階での教材選びの難しさを痛感した1年間だった。私と生徒と教材の関係がしっくりかみあわず、授業づくりが軌道に乗らないままもどかしい1学期を過ごした。1学期で、学習する関係、をつくり得なかったために、2学期の最初に改めて、「出会い」をつくり直さなければならなかった。授業にほとんどのこってこない生徒を引き込むことのできるような教材はないものか。そこで取り上げたのが「太陽の子」である。また、この年ぜひ取り上げたいと機をねらっていた教材として、花盛安治の「塩鮭の歌」と吉野秀雄の短歌があった。これは高校1年の国語学習の成立をめざした実践の報告である。

## 1. なぜ「太陽の子」を取り上げたか

(1) なぜ1学期の「出会い」づくりがつまずいたのか

1学期のつまずきの原因はいくつか考えられる。

第1は、授業の持ち方が3通りで、進度のズレから私自身の授業づくりのリズムがつかれなかったことがある。国語教室通信を出すタイミングも難しく、なかなか調子が出なかった。また、単に担当時間が違うだけでなく、クラス毎の状況がかなり違っていた。(「年間の授業の流れ」参照)それに対する細かい対応ができなかった。準備不足で常に後手にまわってしまい、生徒を生かしきれない。私自身の個人的理由による大スランプ(8月まで「再起不能」宣言をするほどの)も響いていた。

第2は、表面に現われる生徒の「学習ばなれ」、幼児化現象が年々確実に程度を増していること。それはもちろん表層的なものであり、心の底では、どんな時代にもどんな人にも、よりよく生きたい、より素敵な自分になりたい、そのために学び

たいという本能がある。だからこそ教育が成り立ち、それを信じるからこそ私たちは授業づくりをするのだが、近年の高校生たちの状況は、その本能をあまりにも奥深くしまいこみすぎて、ちょっとやそっとの働きかけでは動き出さない。中学時代の学習が高校受験のためだけに費やされていて、高校に入ってきた段階で既に、授業にたいしては、学が喜び、など期待していないように見える。学習はなれ、や、幼児化、は、生活体験そのものの貧弱さ、冒険的・挑戦的体験の欠如、集団による自治と創造の体験の欠如、準備されすぎた環境のなかで常に待ちうけている序列化のため評価——などの条件から必然的に生じる発達の遅れと関わる。体を動かすことやこまめに作業することを嫌う。管理主義の側がタテにとる、ことばが通じない、という面が確かにある。感覚的・刹那的に楽しめるものを求め、理論で追及していくことを嫌う。深刻さが表面に出ると拒絶する。本質的に大人不信である。しかし、かつての高校生、青年のように、抵抗、という形で不信を表現することはない。彼らは大人の表情を読み、大人の要求に合せてふるまってみせる。その分だけ不信はより根深く、彼ら自身もまた利害関係に非常に敏感である。

何かしら満たされないことへの不満はいっぱいあるのだが、「こんなもんさ」と処理してきた彼らに、ゆさぶりをかけていくのはなかなか大変な仕事だ。「怒らぬ若者たち」に何をつきつけば、衝撃、と、学が喜び、が生まれるのか。

第三は、生徒の実態に気をつけているつもりだったのに、教

材選びを誤ったこと。一番最初に教科書にある教材を妥協して使ったのが失敗で、もっと魅力的な教材を厳選すべきだった。

二番目の教材「学ぶということ」は入学直後の高校生に読んでもらいたいと思いいれをもつて取りあげた教材なのだが、島商に入学したばかりのある程度、満足、している生徒たちには、この中の問題意識がしみあわなかつた。この教材は自由の森学園では入学試験のときの講話として生徒たちの心に響く力があつたろうが、一般の高校では、2年生か3年生の最初の教材として扱ったほうが時期的に意味がありそうだ。

第4は、前年の三年生の到達点と彼らの行動に対して加えられた圧力が、私の中に強烈なイメージとしてあり、その圧力を乗り越えていくもつとしたたかな力を育てなければならぬという思いがあつた。その私の思いと新1年生の実態との差が大きすぎた。あくまでも生徒の実態から出発し、時間をかけてじっくりと働きかけていくという姿勢を私自身がとりもどすまでに時間がかかつた。

## (2) 「太陽の子」をまるごと扱う決心がつくまで

一旦、出会い、づくりを失敗した以上、これをつくり直すには、切り札、となるような教材が必要だ。切り札、となる条件は、人間が生きていくことの重さとするばらしさを突きつけて、心をぐいぐいとつかんでしまうような内容であること。しかも文章がわかりやすいこと。読書生活の基盤がほとんどない生徒たちには、内容がいかにすぐれていても、文章に抵抗があつては、作品世界にスツと入りこんでいけない。この2

2. 年間の授業の流れ

(教科書……明治書院 ▼印……自主教材)

組	月		
一組(家政科) (国語I、4単位) 女子44名	二組(商業科・進学コース) (国語I、5単位) 男子20名、女子25、計45名	三組(商業科) (国語I、4単位中、現代文2時間) 三組・男子24、女子21、計45名 四組・男子23、女子21、計45名 五組・女子45名 六組・女子44名	<p>◎ 単元(考えること、学ぶこと) ▼ 「思索について」 森本哲郎(随筆) ▼ 「学ぶということ」 遠藤 豊(講演)</p> <p>※この単元では学習の基本をつくることをねらった。 「思索について」はそれほどまずい教材でもないが、また、あまり魅力的でもない。 「学ぶということ」は前年三年生の最初の教材として取り上げ、一年間の授業成立の重要なカギになった。これは「自由の森学園」の入学試験の講話で、本当は一年生に読ませなかったのに、意識のゆさぶりのために使ったが、思ったほどの効果がなかった。島商に入学したことである程度満足している生徒たちには、この教材の問題意識がしみわたったようだった。 この最初の単元で生徒をひきつけ得なかったことが、一年間の最後まで続くにつなげられた。</p>
7・6・5	◎ 単元(心理と行動) ▼ 「呪のそら寝」(古文・説話) ▼ 「蔵人得業猿沢の池の龍の事」(古文・説話) ▼ 「狐師、仏を射る」(古文・説話) ▼ 「夕焼け」吉野弘(詩) ▼ 「物と心」小川国夫(小説) ▼ 「幸福」安岡章太郎(小説) ・ 文語文法 ・ 場面の展開、心の推移を表わすことばを読みとる。	◎ 単元(名まえ) ・ 自分の名まえの字の意味を漢和辞典で調べる。 ・ 名まえの意味、由来、エピソードを材料として、自己紹介の作文を書く。 ○ 原稿用紙の使い方、表記の基本。 ▼ 「表札」石垣りん(詩) ▼ 「奈々子」吉野弘(小説) ・ 名まえに託す生き方の姿勢、親の子に対する想いを考える。	<p>※男子、女子ともに比較的雰囲気は明るい。男子の中に無気力な者がいるが、進学コースよりもむしろ一般商業科のクラスの方に、学力・意欲の高い生徒がいる。この単元では、最初は面くらっていたが、けっこうおもしろがっていた。 作文の相互評価は効果的。作文はややワンパタンだが、この段階ではやむをえない。 「表札」は少し難解だったが、ある程度くいついてきた。既製の価値観への衝撃になった。 「奈々子」は好評だった。</p>
3 ~ 1	◎ 単元(生命) ▼ 「生まれて」茨木のり子(詩の鑑賞文) ▼ 「かなしみ」芝生 谷川俊太郎(詩) ▼ 「I was born」吉野弘(詩) ▼ 「木の実」茨木のり子(詩) ▼ 「塩鮭の歌」花森安治(随筆) ▼ 「いのちの炎」吉野秀雄(短歌)	<p>・ 生命・性の神秘・尊厳・美しさを読み味わい、考える。 ・ 生命がつながっていく共生の輪、自然と人間の関係。それにかかわる現代社会のしくみなどを考える。 ・ イメージ豊かに、表現を味わいながら読む。</p>	<p>★この一年間の切り札! ▼ 「太陽の子」灰谷健次郎(長編小説)をまるごと一冊読む ・ 通説(16頁、17頁)毎時間、感想カード記入、提出 ・ 「太陽の子」を読み深めるための自由研究、発表(一組・二組のみ)</p>
3 ~ 1	◎ 単元(生命) ▼ 「生まれて」茨木のり子(詩の鑑賞文) ▼ 「かなしみ」芝生 谷川俊太郎(詩) ▼ 「I was born」吉野弘(詩) ▼ 「木の実」茨木のり子(詩) ▼ 「塩鮭の歌」花森安治(随筆) ▼ 「いのちの炎」吉野秀雄(短歌)	<p>※この単元の教材はどれも生徒たちの中に受け入れられたようだ。特に「I was born」「木の実」「いのちの炎」の印象が強かった。すべての生徒というわけにはもちろんいかないが、教材毎のまとめを読むと、単元のねらいはある程度達せられたのではないかと思う。時間数不足で後半が駆け足になり、ややもったいない扱いをしてしまった。</p>	<p>二組は11月から、一組は1月から週一時間を漢文の時間に当てた。</p>

※一組は内容を楽しみながら読んでいます。授業の雰囲気がとてもいい。ひたむきに学ぶ姿勢があり、話に聞き入る。

※進学コースであるにもかかわらず、授業態度は最悪。学習者の気持ちが入っていかず、読みがおざなり。教材忘れ、課題忘れが常にクラスの1/2、1/3いる状態。

つの条件を考えて「太陽の子」を取り上げたいと思った。いわゆる児童文学だから易しすぎるというふうには考えなかった。平明な表現の中に日常的にこなれたことば使いが多く、表現の面でも十分鑑賞に価する。

問題は、この長い作品を授業の中でどう扱うかということだった。一部だけを取り上げるかどうかで、長いこと迷った。感動を生むためには、やはり全部読ませたい。すると時間がかかりすぎる。たぶん2学期のほとんどを費やすことになる。教科書から思いきって離れることは慣れている私も、これはさすがにためらいがあった。

8月初旬に沖縄で全国学校図書館研究大会があった。沖縄での大会ということで〈沖縄〉に関する講座や分科会が意識的に多く組まれていた。その中に沖縄を題材とした文学作品に関する分科会がいくつかあり、〈灰谷健次郎と「太陽の子」を語る〉という分科会もあった。高校の授業と図書館の分科会の発表者になっていた私は、自分の発表の方はむしろおまけという感じで、幸運にもこうした形で教材研究の機会を得た。大会ではこれとは別に、灰谷健次郎の「命に添う」と題した講演もあった。この分科会（対談）と講演の録音テープを「太陽の子」に関する自由研究をさせる際に生徒に聞かせることもできるなと思った。

図書館大会の後、八重山諸島まで足をのばすことができた。私にとっては沖縄は3度めである。オキナワに対しては私なりの、**「惟い」**がある。この3度めは**「太陽の子」**が頭にあっ

て、どうしても八重山まで行きたかった。石垣島、西表島、竹富島をまわり、ふうちゃんのご郷・波照間島へは行けなかったが、作品の重要な背景である八重山の風土に少しだけ触れてきた。竹富島の民芸資料館に草の葉でつくった玩具があった。

ア、これこれ。ふうちゃんが梶山先生からもらった本を見て、おとうさんのためにつくったやつ。そして、ろくさんの悲しみを引き出してしまった草のおもちゃ。夢中で写真をとる。スライドにして生徒に見せてあげられる。この海の感動的な美しさもせてスライドで見せてあげたい。観光写真の美しさとは違う「生命」に関わる自然の美しさを生徒たちに語りたい。沖縄本島ですら既に失われている、ほんものの海、を見ているうちに、「太陽の子」をまるごと読み通していく決心がついた。

(3) 「太陽の子」から単元「生命」への見通し

「太陽の子」と関わらせて、今、最も生徒たちに語りかけたことは、〈生命と真剣に向きあうこと〉だった。差別をなくすことも、平和を築くことも、環境を守ることも、そして人を愛し、抱きしめることも、すべては生命の大切さを守りぬくことから出発するのだということをお互いに考えたかった。「塩鮭の歌」も「いのちの炎」もその意味でなんとか扱ってみたい材料だった。「太陽の子」で生徒たちが心を動かしてくれば、次の単元「生命」へと結んでいく大きなバネになるという見通しがあった。

### 3. 「太陽の子」の授業のねらいと展開

#### (1) 学習のねらい

- ・何よりも読むことの感動体験をつくりたい。(読書と無縁な生徒たちが、まず理屈ぬきに本を読むことのすばらしさを味わってけるといい。この年は読書ノートの提出など、読書生活づくりを少し意識していた)
- ・わかりやすく、しかも味わい深い表現をじっくり読みこませたい。

・人間のやさしさ、つよさについて共に考えたい。

・この作品のもつ多くの問題を、学習者自身に引き出させ、自由研究のエネルギーにつなげたい。

・沖繩の問題を考えることは、日本人全体の原点だと思う。次の北海道の教材(「塩鮭の歌」と合わせて、日本の南と北の端から、日本の現代社会につながる歴史的問題、矛盾を浮かびあがらせ、問題意識の基盤をつくっておきたい。

#### (2) テキスト

新潮文庫版「太陽の子」を全員に購入させる。(本校では、年度初めに国語副読本費として1人600円を集めている。これで、毎年、文庫か新書を二冊選んでテキストとして取りあげられるようにしている。本代の残りは文集や学習ノート製作の紙代や製本テープ代などに当てている)

#### (3) 授業の展開

・テキスト通読(17h)

通読はすべて私の朗読で進めた。50分間のうち、3〜4章ずつ朗読する。(30〜35分かかる)(全部で52章、1時間に3章進むのが標準。4章まで欲張ると、最後のカードを書く時間がなくなると、時間内の作業ができなくなる)

生徒は聞きながら、心にとまった部分に線を引く。

時間毎の最後の10〜15分で、カードに抜き書き、感想を書きとめる。感想カードはB5のプリントで同じ様式のもを毎時間配布。その時間の終わりに提出。時間内に書けなかった者は、後で提出。私はそれに目を通して、コピーし、次の時間に返却する。感想を書いている者には、全部にことばを添えて返すことはできないが、赤線だけは必ず引いて返す。

毎時間同じ作業のようだけれども、3章毎のくぎりの中に必ず山場や次の場面への伏線があって、決して退屈することなく、しだいに感想カードの興味も深まっていった。抜き書きだけでも済ませている者へは、少しずつ感想も加えるように促す。最後に感想カードをとして1冊のノートにすることを予告して、返却されたカードを保存させておく。

・「太陽の子」を読み深めるための自由研究

知りたいことを出し合う。(臨時のグループ……近所の席、4〜5人で、知りたいことを全部あげる。あげられたテーマを黒板に書き出し、テーマの分類をする)

\*テーマ……沖繩の自然、歴史、文化(衣食住、ことばと芸術)、戦争、作者テーマ毎に希望者が班をつくる。

図書館で研究、発表のための資料づくり(6h)

(ここでは、「太陽の子」の内容と関わせて、情報を選択しながら調べること、出典を明記すること、発表のためにわかりやすい資料をつくるなどを指導した。)

\*発表表(3h) 1時間2班ずつ

(発表の基本的なマナー、資料……プリント、写真などの提示のしかたの工夫、聞き手は必ず質問や感想を出すこと、特に自分たちの研究に関連した部分を見つけて感想を出すことなどを指導した。1組の発表は公開授業)

・作品を読み深めるために、私はどの表現に目をつけてどんなことを考えたかという説明を加える。(2h)

・学習のまとめをプリント1〜2枚に書く。(2学期中に時間がとれなくなって、冬休み中の課題とした。)

・学習ノートを3学期初めにとじて提出する。(学習ノートの内容①1・2組は、感想カード、学習のまとめ、各班の発表資料。3〜6組はカードと学習のまとめ)

(4) 評価

・中間考査・期末考査では、「太陽の子」の何章から何章までと範囲を区切って、ふつうの(?)読解の問題と、作品のポイントとなる部分の表現(せりふなど)について、意見を述べる問題を出題した。テストを返却する時に、特に後者の問題について時間をとって説明し、試験と授業とを結びつける試みをした。また、言語事項については範囲が非常に広くて

学習意欲も起きないだろうと予測し、こちらの方で(漢字の読み、書き、語句の意味)学習用のプリントをつくって配布した。1・2組は調査、発表の基礎知識も筆記試験の出題に入れた。

・最終的な評価は、学習ノートの内容を重視して、学年末の評価に反映させた。

#### 4. 単元(生命)

(1) 単元のねらい

「年間の授業の流れ」参照

(2) テキスト

すべてプリント。最後に教材もノートに相当するプリントも全部として1冊の学習ノートにすることを想定してプリントをつくっていく。初めから1冊にして渡さないのは、想像して読む、作業を大切にしたい教材があって先をふせておきたいこと、途中でプリントを提出させる場合、1枚ずつの方が便利であることなどによる。

(3) かくしテーマですすめる

最初に、「今から学習するいくつかの教材は一つのテーマでつながっているけれど、そのテーマはまだ教えない。一人一人、テーマは何だろうと考えながら学んでほしい」と述べる。

(4) 「生まれて」の授業

・「かなしみ」「芝生」を読んで感じたことをプリントに記入

する。年齢あてクイズ付き、その時間の終わりに提出。

・前の時間提出されたプリントの中から、いくつかの感想を紹介。年齢あてクイズの答の分析も紹介する。さて、この二つの詩人を、一人の詩人がこういうふう読んでると、「生まれて」のテキストを配布。まず前半部分を範読、プリントに自分でまとめめる。その後、説明しながら、板書でまとめる。(3h)

・テキスト後半の読みとりとまとめ(2h)  
・学習のまとめを書いて提出

(5) 「木の実」の授業

・連がすすむ度に内容が意外な展開をみせ、それにつれて重いテーマが提示されるこの詩の特徴を使ってみよう、部分毎に分けて書いた細かいプリントを段階毎に用意した。

・step 1. 「生まれて」を書いた茨城のり子さんの詩を読むけれど、まず題名だけ教えるから、どんな内容の詩か想像して書いて「らん」と、黒板に大きく「木の実」と書く。

step 1のプリント配布。5分間で書き、近くの席で交換して読む。何人かとどんどん取り換えて読ませ、ストップをかけた時点で持っている人のものを読みあげさせる。(ゲームのようにワーワー言いながらやっている。これは一種の遊びだが、「木の実」という題から、比較的やさしい、おだやかな雰囲気、あるいは少しものさびしげな雰囲気の内容が想像できるだろうと予測できる。そこで、この詩の衝撃的内容との意外性をきわだたせたいというねらいがある)

step 2. step 1のプリントを本人のもとにそれぞれとさせ、step 2のプリントを配り、step 1の下にはらせる(のりを貼ってくるよう、前時、連絡してある)。step 2のポイントは「木の実」の正体に当たる部分を空欄にしておいて、一連の他のことは手がかりにして想像することである。プリントの発問に従って書きこみ、検討しながらすすめ、最後の空欄の部分話し合わせる。がいこつ、どくろという答を出す生徒がほとんどのクラスで一人はいた。ある程度答がいこつか出て考えたところで、黒板に大きく「欄骸」と書く。その瞬間、緊張とざわめきが起る。(step 1・2で1h)

step 3. 第一連の木の木の正体がわかったところで、どうしてこんなところに欄骸があるのかと考えてみる。各自考えてプリントに記入、何人かに発表してもらう。その後でstep 4のプリントを配り、step 3の下にはらせる。

step 4. 第二連で明かされるいきさつに、さらに生徒たちは驚く。ミンダナオ島について説明をする。フィリピンになぜ日本兵が行くことになったか、戦争中だけでなく、現在のフィリピンと日本の関係(特にバナナのこと)を説明する。(step 3・4で1h)

step 5. 第三連・第四連の想いを考える。「もし、それが、わたしだったら……」の先を考えてみる。

step 6. 第五連・第六連を示し、「もし、それが、わたしだったら……」の続きを何度も書くこと考えながら、ついに書けず、書けなかったことをそのまま書いた作者の心を考える。

step 7. 第七連・第八連を示し、「もし、それが、わたしだったら……」の続きを何度も書くこと考えながら、ついに書けず、書けなかったことをそのまま書いた作者の心を考える。

(step 5. 6 p. 1h)

・学習のまとめを書いて提出

(6) 「塩鮭の歌」の授業

・1章〜3章は鮭の一生について述べられていて、描写の見事さ、表現の美しさ・おもしろさを味わうことに重点をおく。

・4章〜8章は鮭をめぐる様々な問題が述べられていて、説明文として、構造と筆者の問題意識を読みとることに重点をおく。

・1組と3〜6組は時間不足で、全体を通読して表現のすぐれているところに線を引き、全体の構造と問題を説明するにとどまったが、2組は時間をかけて、見出しつけ、すぐれた表現の抜き書き(1〜3章)、内容の構造図化(4〜8章)の作業を行った。また、それぞれの作業が読みのテクニクとしてどんな意味をもっているかなど方法の手引きをプリントの中で位置づけた。

・学習のまとめを書いて提出

(7) 「いのちの炎」の授業

・吉野秀雄の短歌から妻の死の前後を詠んだ一連の歌27首をとり、その中の頂点の一首「これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹」から、題名を「いのちの炎」とつけた。

・全体に目を通して時代状況がわかる語句をあげさせたうえで、一首ずつ説明を加えて読み通していく。これはほとんど一方的に私の解釈による講義の形で進めた。生徒たちは説明

を聞きながら、テキストに書きこみをしていく。

・「いのちの炎」を読んだので感想を書いて提出

5. 実践を終えて

「太陽の子」を読むのに2学期まるまる費やしてしまった。確かに冒険ではあったが、いろいろやって何も残らないよりは、これだけはやったというものを残したいと思った。授業のやり方を工夫したというよりは、作品のもつ力に依存した実践である。

ほとんど本を読むということをしなない男子生徒たちが、自習時間に課題そっちのけで「太陽の子」に読みふけり、監督の先生に「これ、おもしろかよ」と言ったそうだ。テキストのことを「ふうちゃん」と呼び(テキストを持ってこなかった時、「先生、ふうちゃんを忘れました」と言いにくる)、国語の時間を「ふうちゃんの時間」と呼ぶくらい、「ふうちゃん」は生徒たちの日常的世界に棲みついたようである。生徒たちがそれですぐに本好きになるわけではないが、一つの作品を読み通すことで感動を味わうという点では、かなり目的を達したと思っている。

ひたすら読む(朗読を聞きながら読む)ということに17時間かけたことを、この場合はムダとは思わない。朗読に身をひたす、という体験は、朗読が読解のための部分的な一方法として組みこまれる普段の授業では、なかなか得難い。テキストが配られると、興味を持った生徒はもちろん待ちきれずに先に読み進んでいる。それでも授業中先生の朗読を聞くとまた違う感動がおこ

ると書いています。また、ある生徒は、先を読みたくてしかたないけど、授業の時読んでもらって自分の中における変化を大切にしたいので、先を読むのをがまんしていたと記している。私の方は同じ箇所を6回読むことになるのだが、マンネリになるどころか、次の時間はこのクラスでこの本を読んであげられると楽しみにして教室へ行った。長崎で子どもの本の専門店「童話館」を聞いている川端さんと、春休みにこの実践について語る機会があった。その折、川端さんは、「どんなに上手な朗読でも、テープじゃだめなんだ。親や先生が目の前で、自分の肉声で物語を読んだり語ったりして聞かせることが、子どもにとつてどれほど大切かわからない。あなたから『太陽の子』を読んでもらった生徒たちは、とても幸せな体験をしたんだ。その体験はすぐ形にならなくても、体の中から決して消えない」と語ってくれた。

1年間をふり返ってみると、2学期以降の実践をもっと早く始めるべきではなかったかと思える。生徒たちに対する働きかけ、生徒たちの変化が、1学期分遅れたという感じがある。生徒たちと教材との出会いの大切さ、高校1年という段階での教材選びの難しさを改めて感じた。

授業の準備が、考えていたことの3分の1しかできなかった。例えば『太陽の子』を読みすすめる過程で、毎時間の生徒の感想をプリントで投げ返していければ、感想がもっと深まっただろうと思える。しかし、感想カードに目を通して、コピーして返却するのが精一杯（1日平均3クラスあるから、空時間はこれだけの作業でほとんどつぶれる）で、結局、最後のまとめを国語教室通

信に載せることしかできなかった。

最も心を悩ませ、このクラスのためにこそ教材を選んできたつもりでの進学コースの生徒たちと、ついに最後まで心を通わせることができなかった。学習集団づくりをするつもりでの自由研究も、1組が深い調べ方をして成果をあげたのに対し、2組は表面的な調べ方しかせず、十分な成果をあげることができなかった。それでも、クラスの3分の2くらいの生徒には少しずつ問題意識が芽生え、話を聞く態度ができてはじめてはいいた。このクラスを持ちあがるべきかどうか、年度末ギリギリまで悩んだ。こんなことは8年間で初めてのことだった。2年生では持ち時間の関係で、全クラス持つことはできず、1組（家政科）だけを切り離さざるを得ない。進学コースを含めた商業科5クラスを持つか、家政科と1年生を持つか、どちらかになる。私にとっては、1組を選ぶか2組を選ぶかの問題だった。1組は非常に素直に授業についてきて力を伸ばしていくことができるだろう。2組は信頼関係ができていない。私の授業を受けたくないと言ったアンケートにハッキリ答える者が少なくとも5人いる。持ちあがっても、どうしようもなく相性が悪いということだ。——結局、私は2組との出会いを3度つくり直すことに賭けた。今はその実践のまっただ中である。少なくとも、3度めの出会いがなんとか成功の方向に向かっている手応えがある。

2年商業科の他のクラスでは、2年になって、ゆるみ、がどうしようもなく出ているものの、共に学ぶ者の関係がある程度で

きている安定感がある。〈授業で得たものが日常生活の中でどのように生きているか〉ということが私の最も知りたいことの一つだが、その反応をつかむために「話のタネのノート」をつくらせている。学習直後に書く感想とは別に、このノートの中に出てくる反応が大切だと思っている。「太陽の子」をはじめとする1年の教材に関する話題がときどき出てくる。彼らの心の中に学習したことが生きていることを感じる。

2年になって授業を離れた1組の生徒のうち十数人が、国語教室通信をもらいにくる。

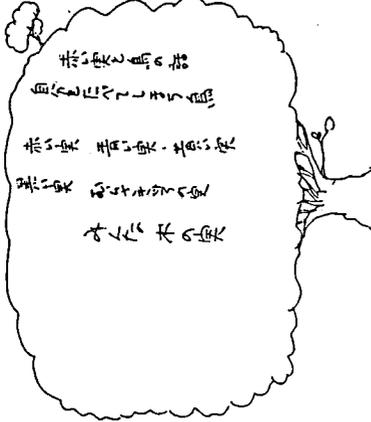
授業は学習者にとっては〈権利〉であり、私たち教師からは〈贈り物〉である。自分がいいと思って選んでも、相手の趣味や関心に合わなければ、心から受け取ってはもらえない。相手にふさわしいものを選びぬき、包み方や飾りも工夫を凝らし、手渡すタイミングまで計って渡す贈り手でありたい。



517-1

# 木の葉

……と公認だろう



(17)

517-2

# 木の葉

葉のよ

(1) 樹に

青い木々葉葉を りとつ  
 現地の若者は するする葉り  
 まま伸はうとして葉り落ちた  
 木の葉と夏たの日は  
 青むらへ 樹の根をたのむ

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

戦身でたたく人 (日本兵が葉をたたく)  
 この言葉、戦場で 呼ぶくはやく  
 木の葉は天、死体の下から木が出て  
 青く 成長す

(18)

517-2

# 木の葉

葉のよ

(1) 樹に

青い木々葉葉を りとつ  
 現地の若者は するする葉り  
 まま伸はうとして葉り落ちた  
 木の葉と夏たの日は  
 青むらへ 樹の根をたのむ

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

樹 - 青い木々葉葉を りとつ

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

樹の「根」はどのようにしてたたくのだろうか

517-3

# 木の葉

葉のよ

(1) 樹に

青い木々葉葉を りとつ  
 現地の若者は するする葉り  
 まま伸はうとして葉り落ちた  
 木の葉と夏たの日は  
 青むらへ 樹の根をたのむ

(2) ミツバチ

二十六年の春  
 ミツバチの巣、けけ木の葉  
 蜂はとて葉のいろを  
 はりたて ちいしと叫びて  
 木の葉は、たのむ 葉のよ、たのむよ  
 葉のよ、たのむよ  
 木の葉、たのむよ

(187)

木の実

茶のり子

(1) 前へ梅に  
青い実を茶袋からうつ  
理想の書物は下書きの巻  
茶を淹はつとつと淹り落した  
木の實と実をたのび  
夢むた一冊の書物もある

(188)

三つの子

二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

(19)

(189)

木の実

茶のり子

(1) 前へ梅に  
青い実を茶袋からうつ  
理想の書物は下書きの巻  
茶を淹はつとつと淹り落した  
木の實と実をたのび  
夢むた一冊の書物もある

(190)

三つの子

二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

(191)

三つの子

二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

(192)

三つの子

二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

(193)

三つの子

二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

(20)

(2)

茶袋  
二の巻  
お茶を淹はつとつと淹り落した  
理想の書物は下書きの巻

(3)

三つの子  
二十一年の春  
三つの子は父の木の枝に  
新葉に日本茶のうらさ  
はすなをらうと叫ぶ  
お茶が隠れてあふた 暮茶をたのびし子  
若くして一本の木に  
くんくん泣きしうたに

☑ 三つの子に合して三つの子をたのびし

☐ 母 ☐ 女

☑ もしお茶が淹れたら……の巻は……

今うらしたしはらるのうらさ  
茶袋のうらさにあふた

(4)

もしお茶が淹れたら……の巻は……

☑ 茶袋を三つの子に淹らして淹らさる。

☑ もしお茶が淹れたら……と 作者は……

☐ 三 ☐ 回

☑ 三つの子から作者の真意をたのびし

茶袋のうらさにあふた  
理想の書物は下書きの巻  
茶を淹はつとつと淹り落した  
木の實と実をたのび  
夢むた一冊の書物もある